

阿蘇の豪族「藏原一族」の歴史記録集めた

「くらはら館」



場所：西町（市道沿い）



阿蘇五岳を借景とした庭園と藏原惟祀氏の碑

昔から阿蘇家の重臣として仕え、その後も明治、大正、昭和期と、阿蘇郡の発展に多大に貢献し、政治・文化などあらゆる分野で傑出した人材を数多く輩出してきた藏原一族。

「くらはら館」は、江戸末期に建てられた初代黒川村長相賀鑑信氏の家（武家屋敷）と、庭園をそのまま活かして、歴代が残した偉業の数々の記録を集めた、その時代ごとの阿蘇の姿をも伺える館です。また、阿蘇が誇る詩人藏原伸二郎氏の初版本「東洋の満月」や、映画「南極物語」等で知られる映画監督藏原惟繕氏の作品に関係する展示等もあります。

このほど、惟康氏の後当主となつた惟祀氏のご子息藏原英雄さんやご親戚のご尽力により、生家西町にて貴重な資料を本年11月まで見せていただけるようになりました。

【藏原家の人々を顧みる】

藏原家に代々受け継がれる「藏原家先祖記鑑」の記録から主な人たちを紹介します。

氏名に阿蘇家と同じく男子に「惟」の文字がついているのも戦国大名阿蘇氏の重臣として深い信頼を受けた証といえます。

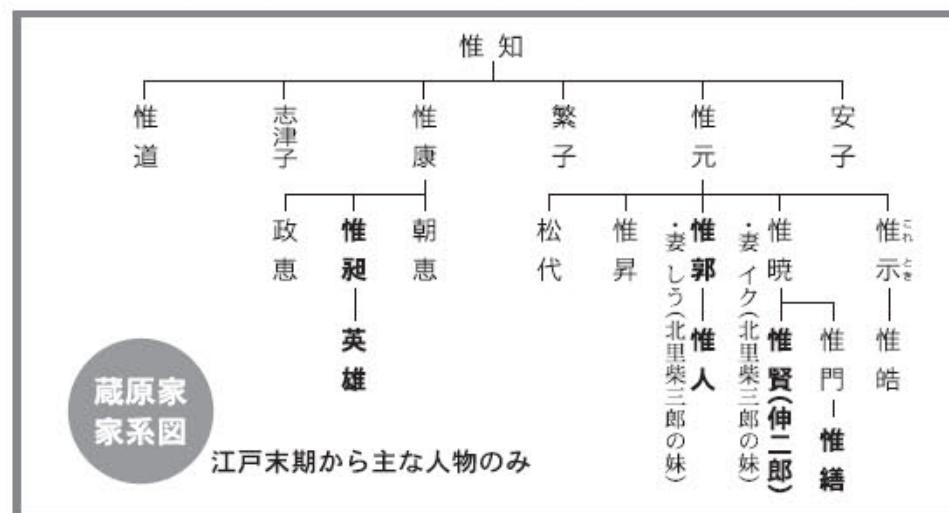
なお、紹介文は、郷土史探究に力を注がれた亡き井野忠治氏（内牧）が、平成9年に発刊した「藏原家先祖記鑑抄」を参考にしています。井野氏は発刊にあたり「郷土資料として当町最高のもので、一族の深い教養、正義感、代々庄屋職（役人）として行政の最末端、庶民生活に直面した貴重資料である」と述べています。

「くらはら館」

場所：西町783（市道沿い光徳寺西側）
開館日時：第2・第4日曜の10時～15時（本年11月まで）
（来館希望の方は予め電話でご連絡いただけます）
入館料：無料
連絡先：☎090-3739-9788（藏原）、
または☎096-372-6711（株）興栄塗料機工内



▲先祖蔵原志摩守は二辻塚城の城主であった(1490~1560)。阿蘇谷の平和保全につとめた二辻塚城がいつまでも忘れ去られぬよう、平成10年、多くの方々が賛同し二辻塚に記念碑が建立されている。



蔵原 惟元

惟知の息子。文政13年生まれ。西南の役では、警視庁17等とし出仕し功績を残す。戦後も県下の経営につくし、豊後街道開さくの時には、惟元氏の建議により街道開さくが始まり惟元氏の設計をもとに豊後街道がつくられた。

蔵原 惟郭 (政治家)

惟元の息子。1861年生まれ。熊本洋学校から同志社を経て米・英留学し、哲学や社会学を学ぶ。帰国後、北里柴三郎の妹しうと結婚。熊本英学校校長、熊本女学校校長となるが辞職して上京。教育及び政治活動を精力的に行う。憲政本党から政友会へと遍歴し、明治41年からは無所属の衆議院議員として2期8年活躍。「赤チョッキ」の呼び名で有名な政治家。



▲当時のまま見事な梁などが残る2階。1階には大木一枚ものの板戸などが残る。

蔵原 惟翫 (政治家)

惟康(庄屋、黒川村長)の息子。明治7年生まれ。同志社、東京専門学校(早大)経て、アメリカのエール大学、イギリスのケンブリッジ大学へ留学し国際法學士の学士号を受ける。帰国後、明治33年伊藤博文秘書官となり立憲政友会の設立に尽力。政友会では勝海舟・原敬・清浦奎吾・近衛文麿などと交友が深かった。明治38年帰郷し県議会・村議会議員などを歴任。その間、父惟康と地元の有力者の人たちと共に波野までの鉄道開通に尽力。私財をもって、東京から鉄道院総裁後藤新平をはじめとする関係者を迎えて現地調査を行い、これを機に国鉄の豊肥線の建設が始まる。また、大正15年、阿蘇国立公園達成運動の先駆者となる。

文豪徳富蘇峰は生涯の友人で、惟翫氏の家に泊まり、翌日一緒に遠見ヶ鼻を登山し、惟翫氏が、「名雅な所なので命名してくれ」と頼み、蘇峰が「大観峰」と名づけたと、このやりとりが蘇峰の日記に残されている。その後、蘇峰と惟翫氏は「大観峰」の名前の普及に努めている。

惟翫氏の著書「政界活機」「日露開戦論纂」



▲惟皓氏が海軍大佐時代に使ったカバン(上)と惟翫氏が留学の際に使った旅行カバン(下)



▲一揆襲撃に備えた逃げ口の小窓や子どもや婦人の隠れ部屋。
▼また、階段には引き戸などが備えてある。



蔵原惟人(これひと) (文芸評論家)

惟郭の息子。大正2年生まれ。東京外国語専門学校ロシア語学部卒。昭和初期のプロレタリア文学運動高揚期に活躍。昭和7年、日本共産党幹部として政治活動中、逮捕され裁判にかけられる。戦後は中野重治、宮本百合子らと新日本文学学会を結成。「芸術論」などの著作がある。



蔵原惟繕(これよし) (映画監督)

伸二郎の兄惟門の息子。昭和2年生まれ。日大芸術学部卒。松竹に入社。間もなく日活に移り昭和32年映画監督となる。ドキュメンタリー映画「キタキツネ物語」や「南極物語」はじめ、石原裕次郎主演「俺は待ってるぜ」、浅丘ルリ子主演作品などを手掛ける。蔵原プロダクション主宰。弟の惟ニ氏も映画監督で「象物語」などの作品がある。



▲惟紹氏の友、徳富蘇峰の詩

蔵原伸二郎(しんじろう) (詩人) 本名 惟賢(これかた)

惟郭の兄惟暁の息子。母は北里柴三郎の妹イク。明治32年生まれ。九州学院から慶應大学フランス文学科。処女作詩集「東洋の満月」で川端康成などに激賞され早くも文壇にその地位を確立。その後小説家としてデビュー「猫のいる風景」など多数の作品がある。版画家棟方志功とは終世の交友。晩年は飯能市に住み「東洋の詩魂」、「岩魚」などを発表。

1943年詩人懇話賞、1944年日本詩人賞を受賞。

蔵原惟皓(これつぐ) (海軍大佐)

惟郭の兄惟示の息子。明治12年生まれ。本家惟示家として現住し墓を護ってこられた。阿蘇からは珍しく海軍軍人となり各種艦長等を歴任している。



▲当時のままの書籍を展示



阿蘇で育まれた情感を生かし 詩人 蔵原伸二郎の世界

戦前、戦後と、詩や小説で活躍した蔵原伸二郎の作品を紹介しています。

※蔵原伸二郎小説全集も発刊されています。

▼【終世の友、棟方志功が伸二郎の詩で描いた版画】阿蘇の雄大な自然とあわせた名作です



故郷の山 蔵原伸二郎

二十年幾年ぶりに帰りこし
わが故郷は荒涼たるかな
累々たる火山岩のみ
高原の陽は肌寒くして
山間の小驛に人影もなし
祖先の墓に参らんと
黒く光り
ひとり
風はやき荒野をゆく
これぞこれ
わが出生の黒川村か
わが出生の黒川村か
重なり波たつ怒れる丘陵
高原の陽は肌寒くして
山間の小驛に人影もなし
祖先の墓に参らんと
黒く光り
ひとり
風はやき荒野をゆく
これぞこれ
わが出生の黒川村か
わが出生の黒川村か
重なり波たつ怒れる丘陵
鳥の低く飛び去るあたり
噴煙高く天に吐く
大阿蘇山は
神寂びにけり
黒一點
鳥の低く飛び去るあたり
噴煙高く天に吐く
大阿蘇山は
神寂びにけり

◇ 特集「くらはら館」◇



藏原家に眠っていた様々な文書や遺品、写真などを展示し、一族の歴史を顧みようとして取り組まれている惟穂氏の三男藏原英雄さん（写真左）。「これからもご紹介できる資料が出てくれば展示したい」と、この作業の中で出会う発見や人々とのつながりに目を細めておられます。

現在、熊本市で会社を経営されており、その合間の開館となります、「ご連絡をいただければ阿蘇に来ます」と、まだ若干準備中ですが、快く興味のある方へ対応をしてくださっています。



▲惟穂氏の遺品
国会で必ず着用していた
「赤チョッキ」は、その後、
惟穂氏が譲り受け愛用



▲大正10年、内閣総理大臣原敬の死去を悼み集まった政友会県支部
(惟穂氏は写真中央ほど)



▲藏原惟穂氏

【映画監督藏原惟繕氏の作品と南極観測隊装具品等展示コーナー】

南極を舞台に犬タロ、ジロと高倉健が出演し
大ヒット作となった「南極物語」（昭和58年）
ほか数々の作品を展示（写真の右端が藏原監督）



◀ 昭和33年の防寒装具



タロ・ジロと実際に行動を共にした元南極観測隊員
中村純二氏が当時使っていた防寒装具等を展示！

第1次～2次南極観測隊員・第3次越冬隊員であった中村純二氏（東京都在住）が当時着用していた防寒装具と南極の石、地図などが阿蘇市に貸し出されました。

これは、阿蘇清峰高校での中村氏の講演がきっかけとなり実現したもので、「くらはら館」で展示を行っています。



中村氏は映画「南極物語」のモデルとなった人で、初期の南極観測隊の貴重な品々が、その実話を映画化された藏原監督の作品とともに11月まで展示してありますので、ぜひ、この機会にご覧ください。